

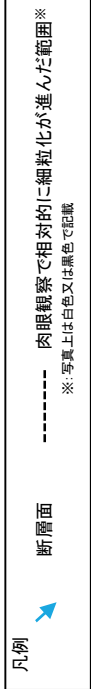
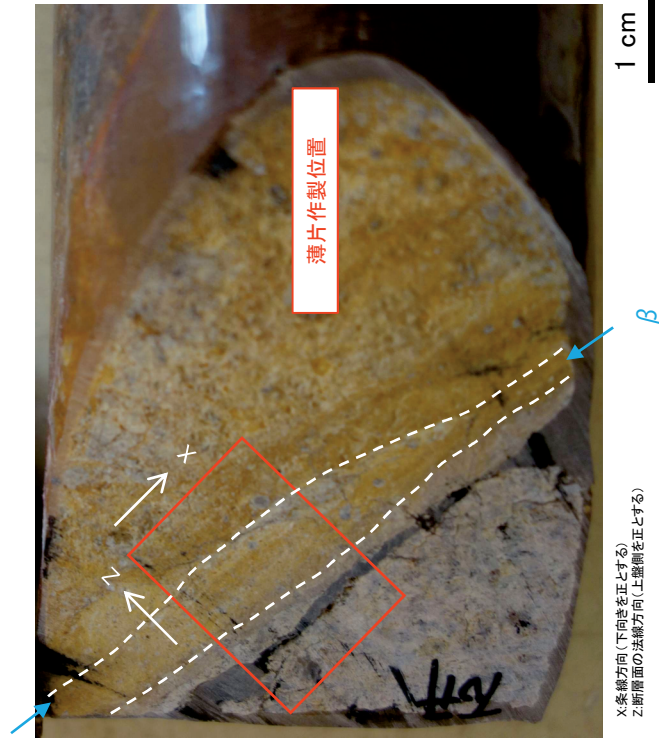
・薄片は断層面 β 及び細粒化が進んだ範囲を含むように作製した。

※断層面 β は最新活動面

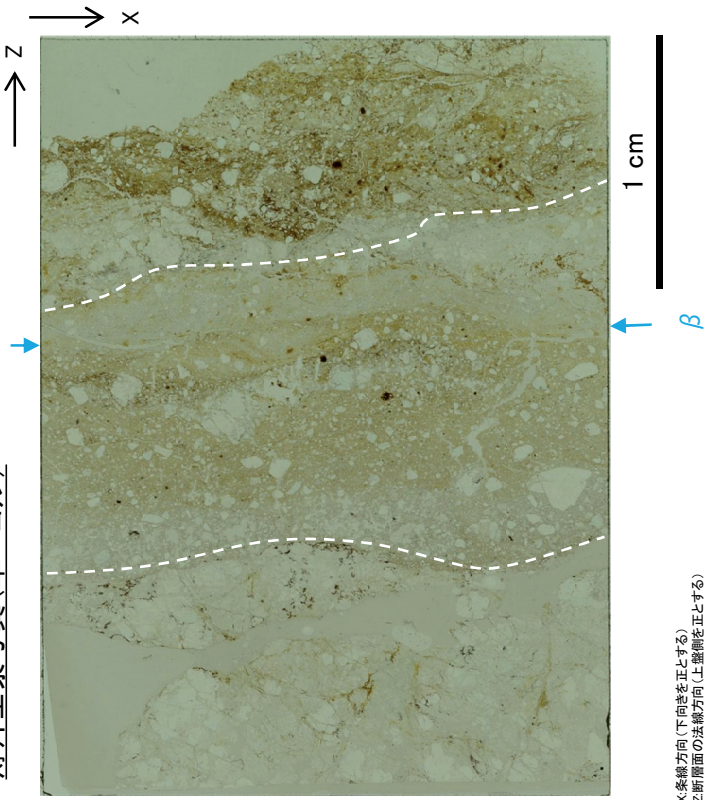
コア写真



薄片作製位置写真



薄片全景写真(単ニコル)



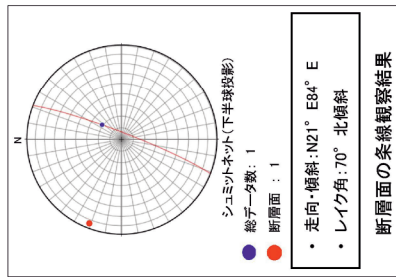
第7.4.4.267図 (2) 破碎部性状 H27-B-1 深度47.40~47.51m (薄片作製位置)

・H27-B-1のボーリングコアから採取した薄片試料の観察結果によれば最新活動ゾーンの変位セシスは、正断層成分が卓越する。

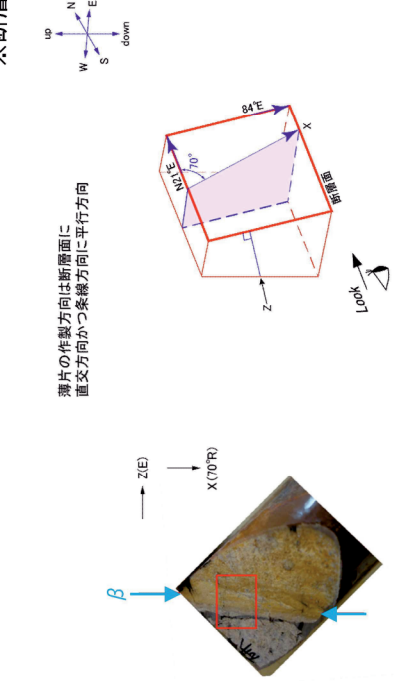
・最新活動ゾーンに以下の特徴が認められることから、断層ガウジと判断した。

- (断層ガウジ)せん断構造に伴う粘土鉱物の定向配列が認められる。
- (断層ガウジ)基質は粘土鉱物を主体とする。
- (断層ガウジ)粘土状部の分布は帯状で直線的である。
- (断層ガウジ)丸みを帯びている岩片が多い。
- 岩片は少ない。

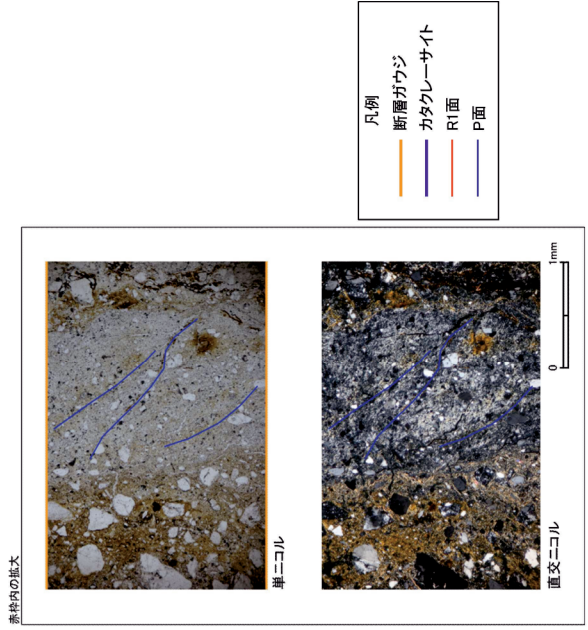
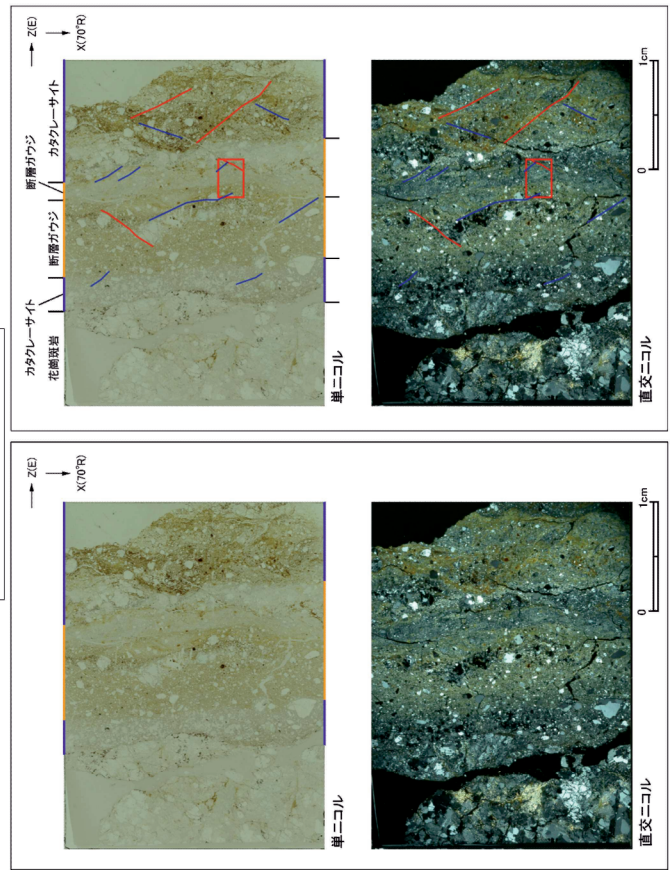
※断層面βは最新活動面



最新活動ゾーン



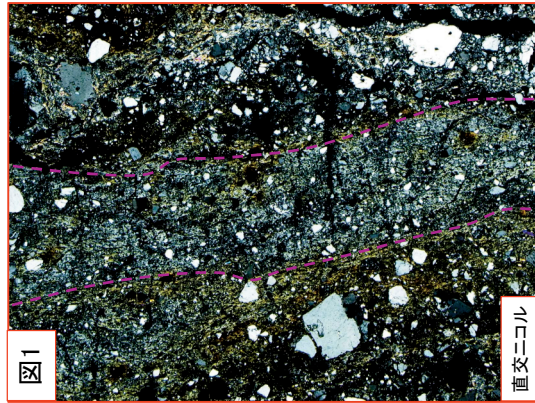
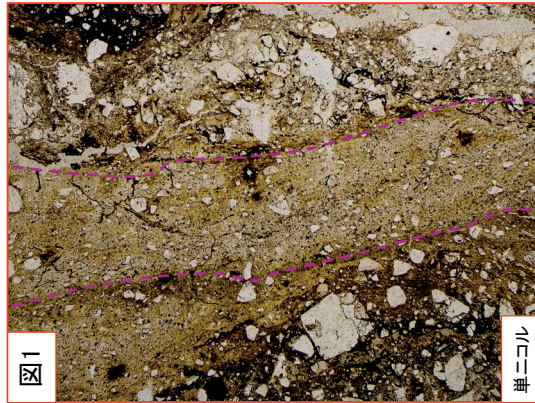
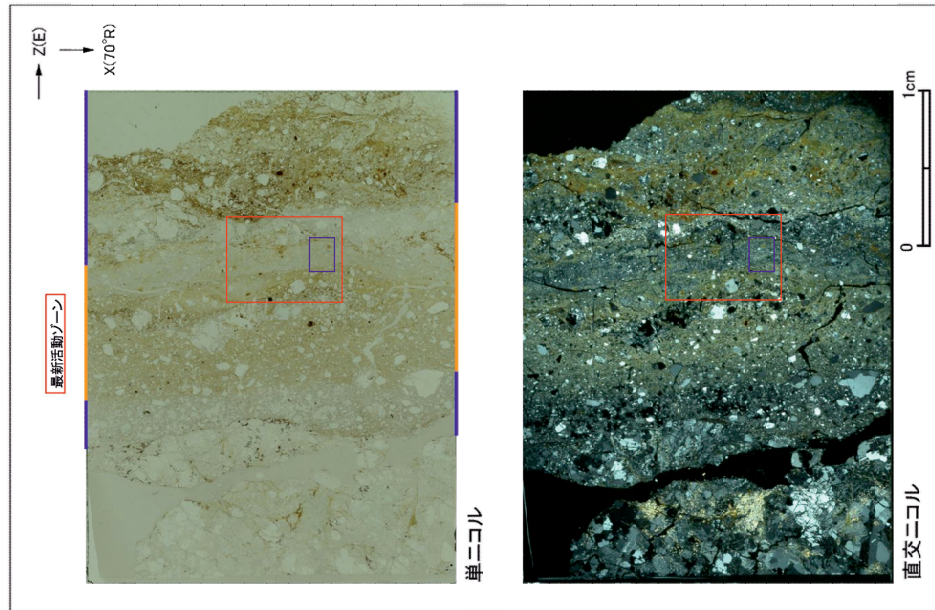
走向・傾斜 N21° E 84° E
 X: 条線方向(下向きを正とする)
 Z: 断層面の法線方向(上向きを正とする)



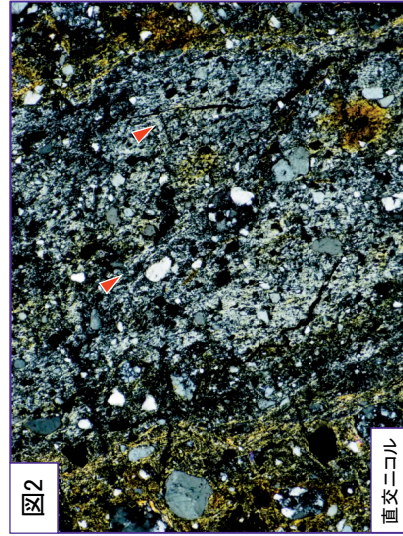
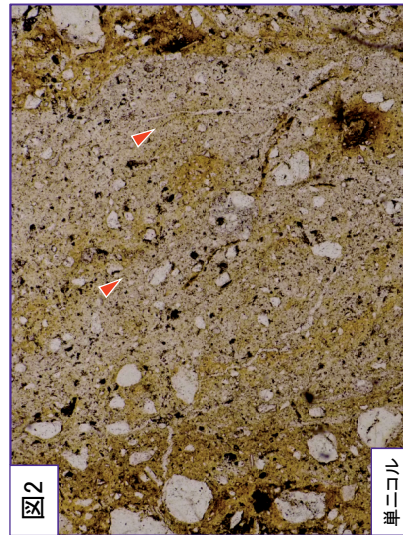
凡例
 断層ガウジ
 カタクレーサイト
 R1面
 P面

第7.4.4.267図 (3) 破碎部性状 H27-B-1 深度47.40~47.51m (変位セシス, 薄片観察による断層岩区分(1/2))

- ・最新活動ゾーンには、以下の特徴が認められる。
- せん断構造に伴う粘土鉱物の定向配列が認められる。(図2)
- 基質は粘土鉱物を主体とする。(図2)
- 粘土状部の分布は帯状で直線的である。(図1)
- 岩片は少ない。(図2)
- 丸みを帯びている岩片が多い。(図2)



破線は帯状で直線的な粘土状部の範囲を示す



赤矢印の方向は粘土鉱物の配列方向を示す

第7.4.4.267図 (4)

破碎部性状 H27-B-1 深度47.40~47.51m (変位センス, 薄片観察による断層岩区分(2/2))

(肉眼観察結果 深度47.40m)

- 肉眼観察では、粘土状部は、やや軟質で、細粒部の連続性及び直線性が良く、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織も認められない。これらのことから断層ガウジであると判断した。

(観察位置)

- 薄片試料は、肉眼観察により認定した断層面 β に沿って最も細粒化した部分を含み、人為的な試料の乱れの無い部分で作製した。

※断層面 β は最新活動面

(薄片観察結果)

- 薄片観察では、以下の通り断層ガウジの特徴が認められた。
 - せん断構造に伴う粘土鉱物の定向配列が認められる。
 - 基質は粘土鉱物を主体とする。
 - 粘土状部の分布は帯状で直線的である。
 - 岩片は少ない。
 - 丸みを帯びている岩片が多い。
- 薄片観察では、カタクレーサイトの特徴が認められなかった。

以上より、薄片観察結果では、最新活動ゾーンの細粒部を断層ガウジであると判断した。



(総合評価)

当該破砕部については、以下の理由から断層ガウジであると評価した。

- 肉眼観察で確認されたやや軟質な粘土状部は、その特徴から断層ガウジであると判断した。
- 薄片観察で確認された最新活動ゾーンの細粒部は、その特徴から断層ガウジである判断した。

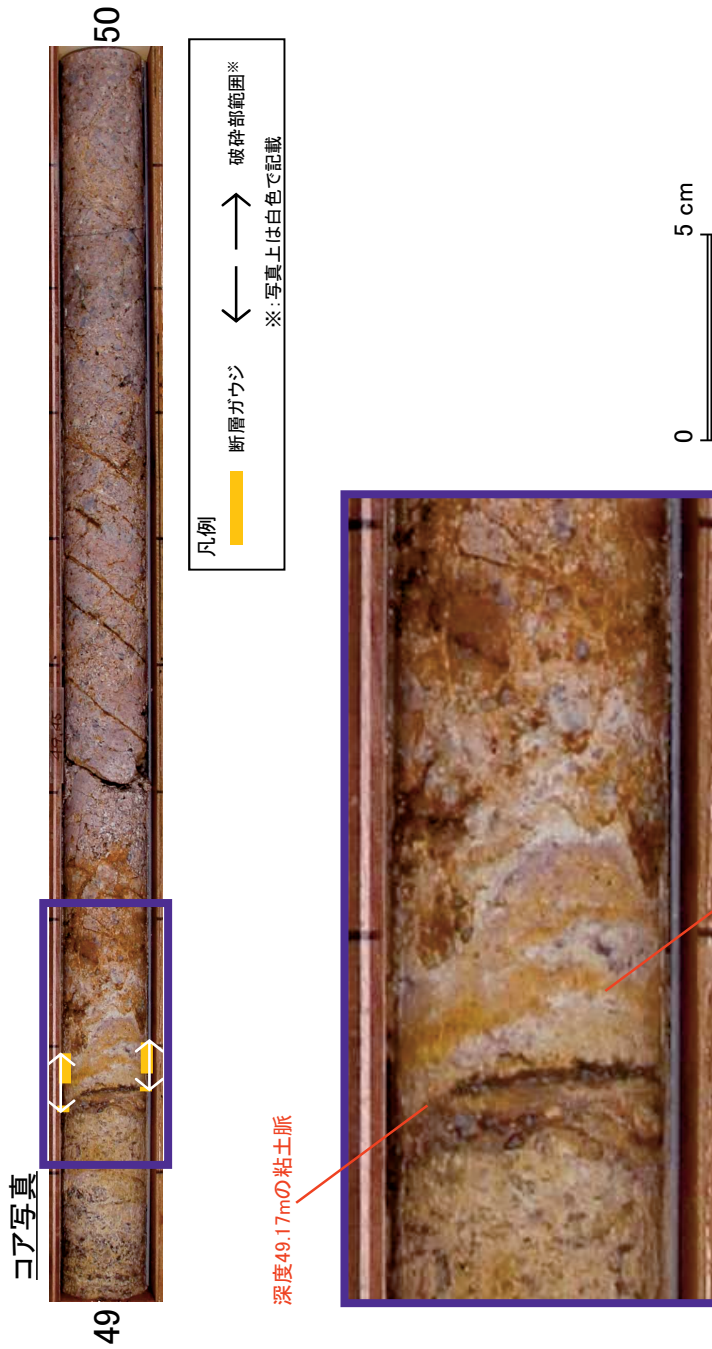
断層ガウジ・断層角礫の有無	断層ガウジ・断層角礫の幅[cm] *	明瞭なせん断構造・変形構造 *
有	0.2	無

*: 断層岩区分の総合評価で断層ガウジ・断層角礫の有無が「有」の場合は肉眼観察結果を記載。断層岩区分の総合評価で断層ガウジ・断層角礫の有無が「無」の場合は「-」と記載して括弧内に肉眼観察結果を記載。

- ・深度49.17～49.20mの「粘土質礫状」と記載の箇所については、全体的に軟質であるが、含まれる細粒部は網目状に分布し、連続性及び直線性に乏しく、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織も認められる。これらのことから変質したカタクレーサーイトであると判断した。
- ・一方、深度49.17mには、幅が狭いため、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織の有無を把握できなかつたが、深度49.20～49.22mの「粘土状」に比べて、連続性及び直線性が良く、軟質な粘土脈を伴う。これらのことから断層ガウジとして扱うこととした。
- ・深度49.20～49.22mの「粘土状」と記載の箇所については、粘土の直線性は乏しいが、軟質で、縞状構造が見られ、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織が認められない。これらのことから断層ガウジとして扱うこととした。

ボーリング柱状図

- 49.17～49.22m：破砕部
- 49.17～49.20m：粘土質礫状部 (Hb) 上端25°で波打って、下端30～36°で湾曲して連続。軟質で、上端には幅1～2mmの直線の暗褐色粘土脈を挟む。径2～3mm石英粒、径5mm粘土化岩片を計20～30%含む。灰白色～明黄褐色を呈する。幅10～25mm。
- 49.20～49.22m：粘土状部 (Hc-2) 上端30～36°、下端35～60°でいずれも湾曲して連続。軟質で、弱い縞状構造がみられる。径1～2mm石英粒を5～10%含む。明黄褐色を呈する。幅7～15mm。
- 49.22～49.27m：上端35～60°で湾曲し、下端23°で波打って連続。上位の破砕部に比べて硬質で、径2～10mmの石英粒や岩片も硬く、原岩組織が明瞭に残る。岩片間に分布する粘土脈に系統性がない。下位の健岩部との境界は漸移的である。にぶい黄橙色を呈する。



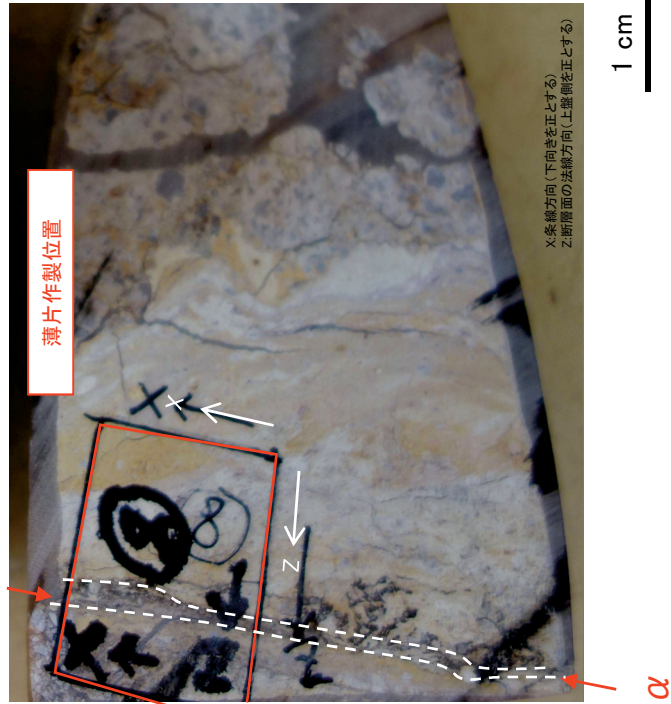
第7.4.4.268図 (1) 破砕部性状 H27-B-1 深度49.17～49.22m (肉眼観察による断層岩区分)

・薄片は断層面 α 及び細粒化が進んだ範囲を含むように作製した。

※断層面 α は最新活動面



薄片作製位置写真



薄片全景写真(単ニコル)

